



## 石塚源太「多相皮膜」 *Genta Ishizuka: Polyphase Membrane*



《Untitled (Hung in a box) #1》2019年 | 漆、麻布、金箔、古い枡 | 17.3x17.3x9.3 cm

《感触の表裏 #12》2019年 | 漆、発泡スチロール球、2wayトリコット 乾漆技法 | 95.5x84x80.5 cm



アートコートギャラリーでは、伝統的な漆芸を核に制作を続ける石塚源太の個展「多相皮膜」を開催します。

乾漆技法で制作された《感触の表裏》シリーズより全高150 cmとなる最大作品や、その三次曲面の「皮膜」を半立体化し新たな空間へのアプローチで見せる新作、金箔と古い枡を用いた《Untitled (Hung in a box)》、つややかな「表面」の奥行きを宇宙的なスケールまで広げる超越的な平面作品《Dual Phase》、漆の制作工程を「皮膜」層の重なりで融合させるモノタイプへの挑戦など。本展では約15点の新作で空間を構成し、二次元と三次元を行き来しながら他に類のない漆造形で「表面」や「皮膜」を探求する、石塚の思考と造形をご紹介します。

石塚源太は、京都市立芸術大学在学中に漆工を学び、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートでの交換留学を経て、大学院修了後の2000年代後半より美術家として作品発表を始めました。漆を素材にさまざまな表現を探るなか、“漆に宿るつや”に自ら魅了され、そのつやによって生じる新たな知覚や、見る者の意識を触発する「皮膜」の存在、思考と作品を一致させ素材の現象を通して見せる抽象造形の可能性に着目していました。以来、石塚は、漆特有の透明な「皮膜」を境に行き交う意識や感覚をその手で捉え、塗面と空間、観者に反照させることで、つやがもたらす未知なる世界へと働きかけています。

そのものの形を漆で「皮膜」として表し、そのつやに宿る知覚や奥行きなど、それらすべて内包し、石塚の作品には多くの「相」を含んでいます。近年では特に、「皮膜の隔たりとその周辺」をキーワードに、鏡面のように磨き上げられたつやと、そのつやに映り込む世界に関心を寄せ制作に取り組んでいます。

《感触の表裏》(2015-)は、球体の凹凸が連なる三次曲面を乾漆技法で仕上げ、「皮膜」を自立させた立体作品シリーズです。内から発する膨張エネルギーやトルソのような形状を感じさせる竹まいは、原型に発泡スチロールの球体と伸縮性の布を取り入れることで生まれ、表面の張りに宿るつやがその形を際立たせています。制作初期の頃から手掛けている蒔絵の技法を用いた平面作品では、ワッシャー、針、カッターナイフの刃などの金属片を無数の星々のように漆黒の闇に漂わせ、宇宙的なイメージの広がりや奥行きへの意識化に加えて、物質の起源への問いを生起させます。

また、漆を扱い制作することで、漆の歴史や過去に作られた工芸品や生活用具にも積極的に接し造形感覚を磨くようになったという石塚は、信仰と素材との関係にも興味を深め、半立体の三次曲面を金箔で覆い、古道具屋で入手した江戸・明治期の枡の中に掛けて見せる新たな作品展開を始めました。懸仏の存在や枡の中に恵比寿像を入れて商売繁盛を願った人々の風習や文化にならない制作したこの《Untitled (Hung in a box)》は、乾漆技法が仏像製作に用いられ表面には金箔が施されてきた歴史とも繋がるものです。

東アジア圏を中心に、漆器をはじめ生活の中で培われてきた漆塗りの技術は、日本において高い水準に達し世界的にも名高く浸透しています。徹底した磨き上げや刷毛跡を残さない仕上げ処理を施す背景には、素地の質が色彩や輝きとなって表面に現れ出ることが重要とする、日本人の精神性が見出せるのではないとも言われています。石塚はつやに映り込む虚実から、「皮膜」の存在を通して見えてくる内実へと、制作意識を昨今さらに深化させています。

昨年はロンドンにて初個展を行い、今年「Loeweクラフトプライズ」ファイナリストに選出されており、京都市芸術新人賞も受賞しました。本展は、グローバルにも注目が集まる中での意欲的な新作個展です。会期中には、日本とアジアの現代美術を中心に研究・キュレーション活動をされている片岡真実氏との対談も予定しています。石塚が制作を重ね捉えゆく、研ぎ澄まされた漆造形と「皮膜」から開く新境地にご期待ください。

### 【展覧会概要】

展覧会タイトル：石塚源太「多相皮膜」 Genta Ishizuka: Polyphase Membrane

会期：2019年7月2日 [火] - 9月21日 [土]

\*休廊：日・月・祝、8/11 - 8/19 (但し、7/21[日]は開廊)

会場：アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間：11:00-19:00 [土曜日-17:00]

### ◆ 関連イベント 2019年7月21日 [日]

14:00-16:00 対談【片岡真実(森美術館 副館長兼チーフ・キュレーター) x 石塚源太】

16:00-17:00 レセプション

\*対談は要予約 (Email: info@artcourtgallery.com または TEL: 06-6354-5444) \*参加費無料

《Dual phase》2019年  
漆、合板、ワッシャー | 30x30x3 cm

主催：アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント) | 協賛：三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社  
協力：京都市立芸術大学

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [担当：大場・灰田・浜田] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問合せ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com



YAGI ART MANAGEMENT, INC.  
ARTCOURT Gallery

## 石塚源太「多相皮膜」 *Genta Ishizuka: Polyphase Membrane*

### 【 Essay 】

#### 「光と闇、自己と非自己の同居」 唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院准教授)

石塚の作品に対峙するとき、私は心地良い眩量を感じる。磨き上げられた〈漆黑〉の皮膜は、光を吸収するとともに反射もしている。そしてその表面に映し出された私は、滑らかな曲面に歪められ、伸びたり縮んだりして見える。それは、私ではないが私でなくもない私である。光と闇、自己と非自己の同居。これら純粋に反対なもの同士の同時性が、三次元的空間と矢印的時間感覚に慣れてしまった私に眩量を起こさせるのである。私は、眩量を起こしたまま、石塚の作品に吸い込まれていく。そして、根源的な場へと誘われる。この体験は実に「妙」だ。

神は「光あれ」と言った。西洋では、この言葉の後が「始まり」とされる。つまり、光と闇が区別され対立するようになった後のことである。しかし、東洋では、神がこの言葉を発するその「刹那」を捉えようとする。それは、光と闇とが分かれる直前の最も潜勢力に満ちた状態である。鈴木大拙(1870-1966)は「この刹那の機会を捕らえるところに、東洋的心理の「玄之又玄」なるものがある。この玄に触れないかぎり、知性はいつも浮き足になる」(鈴木大拙「東洋文化の根柢にあるもの」『新編・東洋的な見方』岩波文庫1997)と述べている。—— この「刹那」こそ、まさに光と闇が同居する〈漆黑〉ではないか。

『創世記』では、人間が禁断の果実を食べたことで「知恵」を身につけたと言われている。ここで言う「知恵」とは、自己と他者とを明確に区別する機能である。この実を食べる直前、アダムとイヴは「夢見る精神」(キルケゴール)の状態だったという。それは、自他の区別がまだ曖昧な状態を意味する。—— この「夢見る精神」こそ、まさに自己と非自己が入り混じる〈漆黑〉ではないか。

つまり石塚は、神が言葉を発するその「刹那」を捉え、自他が区別される直前の「夢見る精神」を、〈漆黑〉の皮膜をもって私たちに見せようとしているのだ。石塚は「漆の声を聞き身を委ねる」と言う(対談「皮膜、その隔たりと周辺について」@ACG Villa Kyoto 2019)。しかし一方で、作品内部の球体のバランスや、外部からの見え方は、綿密に計算している。彼は、明らかに漆と一体になる次元と、自他が明確に区別された次元を往還しているのだ。おそらく、そのようなプロセスがなければ、「刹那」も「夢見る精神」も、ここまでうまく表現できなかったはずだ。

石塚と漆の完全な一体化は「無」を意味する。「完全」とは、欠けるところが無いという意味で「無」と同義である。この「無」と現実世界との中間にある次元変換ポイントこそ、彼の基本的なポジションなのである。そのような意味で、漆という二重否定を肯定する素材は、石塚にとって打って付けの素材であったと言える。

光でもなく闇でもない(それは光でもあり闇でもある)。自己でもなく非自己でもない(それは自己でもあり非自己でもある)。この状態を別の言葉で表すなら「妙」であろう。大拙は「もっとも深いmetaphysicalなものが二元に分かれる前」(鈴木大拙「妙」前掲書p.103)こそが「妙」であると言う。石塚は、その作品を通じて、私たちに「刹那」を見せつけ、「夢見る精神」を感じさせてくれる。そして、限りなく「無」へと近づけさせてくれる。この時の感覚こそ「妙」である。彼の作品に対峙して「妙」を感得してほしい。



《感触の裏側 #12》2019年、《Stellar Dance》2018年  
ACG Villa Kyotoでの展示風景 | 撮影:表恒匡

今年2月、石塚はACG Villa Kyotoでの作品展示の際に、南方熊楠の研究者である唐澤太輔氏と対談を行い、夢と現実、意識と無意識、人の信仰といった哲学や民俗学の観点から、漆の“艶”に映り込む世界に象徴されるものや、その「皮膜」を通して見えてくる複雑な知覚経験の状態や精神性への言語化を試み、本展「多相皮膜」に向けて布石を打ちました。対談後、唐澤氏にはこのエッセイを寄稿いただきました。



## 石塚源太「多相皮膜」 *Genta Ishizuka: Polyphase Membrane*

### 【 CV 】

#### 石塚源太

- 1982 京都生まれ  
 2006 京都市立芸術大学工芸科漆工専攻 卒業  
 ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA、ロンドン) 交換留学  
 2008 京都市立芸術大学大学院工芸科漆工専攻 修了  
 2019 京都市芸術新人賞 受賞

#### | 個展 |

- 2018 「Membrane」 Erskine, Hall & Coe, ロンドン  
 2017 「相手考」 アートスペース虹、京都  
 2015 「感触の表裏」 アートスペース虹、京都  
 2013 「つやのふるまい」 アートスペース虹、京都  
 2011 「たゆたうさかいめ」 アートコートギャラリー、大阪  
 2010 「wonderment」 アートスペース虹、京都  
 2009 「塗面の次元」 アートスペース虹、京都  
 2007 「表層からの気配」 アートスペース虹、京都

#### | グループ展 |

- 2019 「Loewe Craft Prize 2019」 <ファイナリスト選出> 草月会館、東京 (6月26日 - 7月22日)  
 「ACG Villa Kyoto Vol.002 袴田京太郎 x 石塚源太」 ACG Villa Kyoto、京都  
 2018 「15年」 アートコートギャラリー、大阪  
 「現代漆芸」 金沢市立安江金箔工芸館、石川  
 2017 「Hard Bodies」 ミネアポリス美術館、ミネソタ  
 「高見島-京都 日常の果て」 [APP ARTS STUDIOとして参加] 京都精華大学ギャラリーフロール、京都  
 「オープンシアター2017」 KAAAT神奈川芸術劇場、神奈川  
 2016 「瀬戸内国際芸術祭2016」 [APP ARTS STUDIOとして参加] 高見島、香川  
 「リフレクション」 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリーII、岐阜  
 「美の予感 2016-啓蟄-」 高島屋美術画廊(日本橋/大阪/京都/新宿/名古屋/横浜 巡回)  
 「Feather」 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都  
 2015 「オノミチ・ランデブー」 尾道市立美術館、広島  
 「Japan spirit×15」 オリエアート・ギャラリー、東京  
 「still moving」 [APP ARTS STUDIOとして参加]、元崇仁小学校/崇仁地域周辺、京都  
 「琳派400年記念 新鋭選抜展」 京都文化博物館、京都  
 2014 「現代美術工芸の新しい地平 PartI 漆と陶-素材を超えて」 渋谷ヒカリエ8/CUBE 1,2,3、東京  
 「京都府美術工芸新鋭展」 京都文化博物館、京都  
 2011 「六甲ミーツ・アート」 [ユニット(ゆ)として参加] 六甲山上駅内、兵庫  
 「VOCA展2011」 上野の森美術館、東京  
 2010 「きょう・せい」 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都  
 2008 「アートコートフロンティア#6」 アートコートギャラリー、大阪  
 「CRIA展」 京都芸術センター、京都  
 2006 「京都現世美術館」 建仁寺禅居庵、京都  
 2005 「FRAME」 海岸通ギャラリーCASO、大阪

#### | パブリックコレクション |

ミネアポリス美術館 (アメリカ)、ヴィクトリア&アルバート博物館 (イギリス)、京都市美術館 (京都)

image: 《感触の表裏 #12》(部分)